

農業技術協力についての若干の問題

齋 藤 一 男

本岡教授は技術協力を非常に強調しているが、その反面、資本協力のほうはほとんど無視されているような印象を受けた。技術協力が重要であるということはよく理解できるが、これからの問題は、大戸氏も指摘しているように、むしろ資本協力と結びついた技術協力にあるのではなかろうか。例えば牧野氏も指摘しているが、アジア開発銀行に農業開発基金が付設されることになり、この基金との抱き合わせの技術援助が政策担当者間で考えられているようである。第2点は食糧危機というものの認識の違いに大いに関係するが、技術協力の結果増産された生産物をどう始末するのかということである。本岡教授のような発想で1985年に世界の食糧危機がくるのなら、食糧生産に大いに協力し、生産物は全部現地で消費してしまうということでもいいが、必ずしもそうは言いきれないのではないか。かりに米はよいとしても、畑作物、原料作物についてはどうするのか。このような事情も技術協力を進める際にあらかじめ考えておく必要がある。

わたくしはアジア経済研究所でここ一、二年、農業開発問題の研究を預かっているが、その過程で考えていることを2点ばかりここに述べておきたい。

その1点は厳密な意味では東南アジアには属さないが、東南アジアの延長として台湾の農業の研究をもう少しやってみるべきではないかということである。現に、わたくしたちの研究所では台湾からの留学生諸君を動員し、研究にとりかかっている。台湾の農業の研究が重要であると考えることには二つの理由がある。一つは周知のように、アジア地域の中で戦後農業が発展しているのは日本に次いで台湾である。長谷川教授の意見では水稻二期作は台湾の場合でも技術的にはあまりかんばしくないということだが、台湾の農業はこの水稻二期作を軸にして、最近大いに発展の気運をみせつつある。そこで、この国の事情を洗ってみると、なにか東南アジアの農業開発に参考になるような材料が出るのではないかと考えている。もう一つの理由は小倉氏から日本には技術協力に必要な人材がないという話が出たが、実は戦前には台湾で相当数の日本人が活躍していた。そういう日本人の過去の経験をいまから振り返ると、日本人の功績の一部が戦後の台湾農業の発展の基礎になったと思う。これから東南アジアの農業開発に協力しようという場合に、この点がわれわれにひじょうに参考になるのではないかということである。こういう理由から、われわれの研究所では台湾農業の研究を開始しているが、京大東南アジア研究センターでも、東南アジア研究の延長として、ぜひ台湾にも手を伸ばされることを

希望する。とくにわれわれにはできない技術面の研究をおし進められれば、大変ありがたいと思う。

もう1点は、われわれ社会科学面の研究に従事している者は、東南アジア研究の場合、どうもうしろ向きとでもいう研究姿勢に陥りやすいということ。東南アジア地域では発展阻害要因のほうが目立ち、それに気を引かれて、前向きの発展の芽を発見するという研究姿勢にどうしても乏しくなる傾向がある。いくら探しても芽がないという事情があるかもしれない。しかし、これでは具合が悪い。この地域の中で何か現に発展しつつある地点なり産業なりを取り上げ、それを徹底的に洗ってみる必要があるのではなからうか。このような前向きの研究姿勢が必要なのではないかと考える。

東南アジア農業にも発展の芽はさがせばあるはずだ。その一つは大戸氏が言及したタイのメイズ生産である。これを徹底的に調べ、その発展を促進した諸要因、あるいは発展のプロセスを明らかにする必要があると思う。例えばわたくしは1967年2月フィリピンを訪ねたとき、フィリピンの米作にもそういう発展の芽があるのではないかと考えた。具体的には本シンポジウムで問題になっている IR-8 の場合である。わたくしが行ったときにはちょうど乾季作の時期であったが、IR-8 は猛烈なブームをひき起こして農民のあいだに普及していたように見受けられた。IR-8 については本シンポジウムでもいろいろと話が出て、病害に弱い等問題が多いようだが、フィリピンでは反収が2〜3倍もあり、その上に値段が倍近くするといわれ、農民がこれに飛びついている状況であった。フィリピンではもともと大地主制が強固で土地改革をやらぬかぎり農業が発展しないということがひじょうに強くいわれているが、中部ルソンのハンセンダ地帯、大地主地帯に IR-8 がはいており、しかもひじょうに人気があって種不足の状況になっているようであった。もしかりにこの動きが本物であるとする、フィリピンの米作もどうやら発展の芽を出しはじめたのではないかと考えられる。これも徹底的に調べる価値があると思う。なおこの場合も、小倉氏の発言に関係して IR-8 がはたして自給作物であるか、キャッシュ・クロップであるかという問題がある。わたくしの聞いたところでは、どうも現在の段階では種籾としての需要がひじょうに強いようである。従って、キャッシュ・クロップといえるようだ。というのは、農民に IR-8 の味はどうかと聞いたところ、「もったいないから食ったことがない。聞くところによるとまずいそうだ。」という答がえられたからである。ひじょうに高い種籾価格で、これが普及しているから、現在の段階では自給作物とはいいかねる。

フィリピンの場合はまだはっきりしないが、東南アジアを歩き回ると、そうした発展の芽があちこちにあるのではないかと思う。そういう事例をいくつか取り上げ、そのバックになっている諸条件を調べると、そこから、東南アジアの農業開発にさいし、どこからどうしたらよいかという戦略ファクターが見つかるのではなからうか。